

限られた時間で行う情報モラル教育で指導すべきことは何か

—高校1年生に対する情報モラル講習の結果を踏まえて—

村田 育也 坂口 和紀 阿濱 茂樹 河野 稔 長谷川 元洋
福岡教育大学 富良野高等学校 山口大学 兵庫大学 金城学院大学

ikuyam@fukuoka-edu.ac.jp jakk-kazuyan.110@hokkaido-c.ed.jp ahama@yamaguchi-u.ac.jp kawano@hyogo-dai.ac.jp ghase@kinjo-u.ac.jp

初等中等教育における系統的な情報モラル教育が確立しておらず、高等学校3年間を通して継続的に情報モラル教育を実施することが極めて困難な現状で、限られた時間で情報モラル教育を行う際に、何を重視して指導すべきかを明らかにすることは重要な教育課題である。本研究では、昨年実施した高校1年生に対する約3時間の情報モラル講習の結果を用いて、この教育課題について考察し、自由と責任、気軽に使うことの是非、対面でのコミュニケーションなどの項目を見出した。

1. はじめに

初等中等教育において系統的な情報モラル教育がまだ確立されていないので、中学校卒業までに修得された情報モラルとそれに関する知識を前提にして指導することはできない。また、高等学校3年間を通して継続的に情報モラル教育を実施することができれば、ICTに関する科学的な知識や法律を扱いながら、具体的な事例を使って指導することができる。しかし、情報モラル教育を実践することができる時間は限られており、このような指導は極めて困難である。このような現状にあって、限られた時間で情報モラル教育を行う際に、何を重視して指導すべきかを明らかにすることは重要な教育課題だといえる。

2014年5月8日、富良野高等学校において、高校1年生150人（男子70人、女子80人）を対象とした新入生宿泊研修において、約3時間の情報モラル講習を実施した⁽¹⁾。講師は著者の一人（村田）が務め、生徒らに携帯電話・スマートフォンの長所と短所をあげさせ、高校生にとって本当に必要なものを話し合うことによって、質的にも量的にも、携帯電話・スマートフォンの使用を考え直す契機となるよう工夫したものであった。

本研究では、その講習で使用したアンケート調査とワークシート記入の結果を用いて、限られた時間で情報モラル教育を行う場合に、何を重視して指導すべきかについて考察する。

2. 情報モラル講習の結果と考察

2.1 講習の概要

3部構成で行った。第1部は、予め実施していたダンバー数⁽²⁾に関するアンケート調査と、予め配布して記入してきてもらったワークシート1「家族にたずねてみよう」を用いて、ダンバー数に関する講義を行った後、時間の使い方について

討論と発表を行った。第2部は、当日配布したワークシート2「話し合おう」を用いて、グループに分かれて携帯電話・スマートフォンの長所と短所、必要性などについての討論と発表を行った。第3部は、自由と責任、個人性と責任能力、不特定多数の人たちへの情報発信などに関する講義を行った。

2.2 ワークシート2の記入結果と考察

20グループ（1グループ8人程度、実際には6～10人）に分かれて話し合わせ、携帯電話、スマートフォンの長所と短所を配布したワークシート2に3つ以上書くよう指示した。表1と表2は、それぞれ長所と短所について、同じ内容を書いたグループ数を集計して、その数の多いものを降順に並べたものである。なお、長所については、長所の欄に書かれていなくても、必要な理由としてあげられたもののうち、他のグループが長所としてあげているものについては、長所として数えた。

表1のように、長所については、1位「すぐ連絡」、2位「コンパクト」のように、携帯電話、スマートフォンの即時性、可搬性という基本的な特徴をあげたグループが多かった、次に多かったのは、3位「調べるのに便利」、4位「多機能」のように、機能に関する項目であった。また、5位「息抜き・暇つぶし」のように、時間の使い方に関する教育課題となるものもあった。6位「友達が増える」は、ダンバー数に関連させて考えさせることができる項目である。

グループ発表のときに、長所として「気軽にインターネットを使える」と発言したグループ代表者がいた。ワークシートに記入したのは2グループだったが、このとき、他の多くの生徒がうなずくなど同調する反応を示した。これに対しては、「気軽に使えることは本当に長所か。気軽に使えるから問題が起きやすいと言えないか」と問うと、

生徒らに考える様子が見られた。

表2のように、短所では、ネットやスマートフォンの依存症をあげたグループが最も多く、10グループであった。これに、5位「勉強しなくなる」、6位「時間がなくなる」を、重複を除いて加えると14グループであった。多くの生徒が、使い過ぎを短所だと感じているといえる。また、2位「会話が減る・なくなる」をあげたグループが6つあり、携帯電話・スマートフォンを使うことで、対面での会話が減る・なくなると自覚している高校生が少なからずいることもうかがえた。

2.3 事後アンケート結果と考察

講習の最後に、表3の10項目の内容を示して、

表1 ワークシート2長所記入数上位例

| 順位 | 長所 | グループ数 |
|----|----------------------|-------|
| 1 | すぐ連絡、いつでも連絡 緊急に連絡 | 18 |
| 2 | コンパクト、持ち運び | 12 |
| 3 | 調べるのに便利 すぐ調べられる | 9 |
| 4 | 多機能、いろいろできる | 6 |
| 5 | 息抜き、暇つぶし | 4 |
| 6 | 友達が増える 交友の輪が広がる | 3 |

表2 ワークシート2短所記入数上位例

| 順位 | 短所 | グループ数 |
|----|------------------------|-------|
| 1 | ネット依存、スマホ依存 | 10 |
| 2 | 会話が減る・なくなる | 6 |
| 3 | トラブル起きやすい・巻き込まれる | 5 |
| 4 | 体調不良、視力低下 | 4 |
| 4 | 勉強しなくなる 勉強に集中できなくなる | 4 |
| 6 | 犯罪に巻き込まれる ネット詐欺 | 3 |
| 6 | 個人情報漏えい・流出 | 3 |
| 6 | 充電、電気使う | 3 |
| 6 | 時間がとられる・なくなる | 3 |
| 6 | お金かかる | 3 |

表3 アンケート結果（よく理解できたこと・初めて学んだこと）

| No. | 内容 | よく理解できた | | 初めて学んだ | |
|-----|------------------------------------|---------|-------|--------|-------|
| | | 人数 | 割合 | 人数 | 割合 |
| 1 | 人間関係を保てる人の数に限界があること(ダンバー数) | 125 | 0.833 | 142 | 0.947 |
| 2 | SNSで友人を作りすぎて依存する人が増えていること | 115 | 0.767 | 61 | 0.407 |
| 3 | 自由の行使には、責任を伴うこと | 112 | 0.747 | 61 | 0.407 |
| 4 | 未成年者が持てない責任は、一般に保護者が負うこと | 109 | 0.727 | 51 | 0.340 |
| 5 | 未成年者の法的責任能力(14歳未満はゼロ、14～18歳で大きくなる) | 108 | 0.720 | 98 | 0.653 |
| 6 | 不特定多数の人たちへの情報発信は、思っていた以上に難しいこと | 105 | 0.700 | 98 | 0.653 |
| 7 | 人間の脳には、やっかいな(原始的な)部分があること | 101 | 0.673 | 114 | 0.760 |
| 8 | 携帯電話やスマートフォンの必要性は、それほど高くないこと | 97 | 0.647 | 47 | 0.313 |
| 9 | 未成年者が個人性の高い情報メディアを使うことに問題があること | 90 | 0.600 | 70 | 0.467 |
| 10 | 匿名でのコミュニケーションは、思っていた以上に難しいこと | 90 | 0.600 | 94 | 0.627 |

初めて学んだもの、よく理解できたものを、複数選択可としてチェックを入れてもらった。表3は、それらを集計して、よく理解できたもののチェック数をキーとして降順に並べ直したものである。1位と2位はダンバー数に関するもので、しかもダンバー数を初めて学んだと答えた生徒が94%を超えていた。3位～5位は責任に関するもので、7割以上の生徒がインターネット使用時の責任について理解を深めたといえる。

3. 重要な指導内容に関する考察

以上の考察から、以下の5つを重要な指導内容としてあげることができる。

- (1) 未成年者の責任能力、自由と責任について正しく理解させ、インターネット使用時においても常に責任が伴うことを理解させる
- (2) 「気軽に」使えることは携帯電話・スマートフォンの長所ではなく短所ではないかと考えさせる
- (3) 携帯電話・スマートフォンの使用によって、対面での会話が減ることを自覚させ、対面でのコミュニケーションの大切さに気付かせる
- (4) 依存が問題であることを再確認させ、つい使い過ぎてしまうことはないかと考えさせる
- (5) ダンバー数を説明した上で、多すぎるネット上の友人は、良好な人間関係を維持するための障害となること、ネット依存の原因になることを理解させる

謝辞

本研究はJSPS科研費26590226の助成を受けたものです。

参考文献

- (1) 村田育也・坂口和紀：高校1年生に対する情報モラルに関する基礎的学習指導実践について、教育システム情報学会第39回全国大会講演論文集、pp.213-214(2014)。
- (2) Robin Dunbar: Grooming, Gossip, and the Evolution of Language, Harvard University Press(1996)。